30年間の「実践」を支えてくれた人々からいただいた言葉の数々

学会賞受賞論文
奈良県橿原市立耳成小学校

団上　哲

1　はじめに

私が奈良県公立小学校の教員に採用されたのは平成元年。30年あまりの長きにわたり教員生活を続けられているのは、出会った人々からいただいた言葉に励まされたり、あやまちに気づかされたりしたおかげである。本稿では私の半生を5つの時代に分け、実践と言葉の関わりをまとめていくことにする。

2　辻田先生との出会い（学生時代）

2-1　マンガ少年

小学生時代の私は運動が苦手で、将来の夢はマンガ家であった。しかし、中学校で野球部に入ってからは、生活の中心は運動にシフトした。高校、大学ではサッカー部に入り、将来の夢もマンガ家から教師に変わった。

兵庫教育大学では中学校教員の免許を副免としてとるために美術系コースを選択した。そこで辻田嘉邦先生と出会い、先生の人柄と授業の面白さに惹かれ辻田ゼミを希望した。

大学でショックだったのは、自分よりも絵やイラストがうまい人が美術系の仲間以外にも沢山いたことだ。美術の実技演習でも自分はなんて下手なのだ、と思うことが多かった。

しかし、マンガが好きなことには変わりがなく、辻田ゼミでは卒業論文のテーマを「マンガの児童画に与える影響についての研究」にした。辻田先生のご指導のおかげで、夢中になりまとめていくうちに、完成時の原稿枚数はノルマの倍になり、それを要約したものは翌年「美育文化[1]」誌に掲載された。

2-2　甲・乙・丙・丁

辻田先生から教わった内容で、何度も学級通信に引用させていただいている内容がある。それは「甲・乙・丙・丁」という表記による評価[2]である。

甲は春先に草木が芽をふき出し、まだ殻をかぶっている形（早熟な子ども）、乙は春先に芽が出かけたものの、寒さのために、まだ出かねて先が曲がっている形（性急な子ども）、丙は囲いの中で火が燃えている形（まだ自分の力を出し切れない子ども）、丁は器から水が溢れ出る形（個性的であり型にはまらない子ども）を表している。

辻田先生は「この丁は勢いの強い滝のような水の流れだから、放っておくとどこへ行くか分からないけど、ちゃんと道筋をつけてあげればすごい力を発揮する可能性がある」と言われた。小学生時代は運動、大学生時代は、美術に関して劣等感を持っていた私にとって、この話は強く心に残った。

丁の評価をされた子は自分自身だ。そんな子に勇気と自信を与えられる教師になりたい、という思いを強くした。そして、辻田先生に道筋をつけていただいた丁の子(私)は先に述べた卒業論文を完成させ、無事卒業もすることができた。

3　とにかくやってみた（新人時代）

3-1　豊かな自然と少人数をいかして

初めてお世話になったのは、標高約700メートルの自然豊かな山間部にあり、全校児童が９名の野迫川村立野川小学校であった。

写真１　「みて！」

写真１は登校してきた子ども達が、水たまりに張った大きな氷を「みて！」と持ってきたものである。その後の私の研究テーマ「みて！と言える造形教育をめざして」の原点が、すでにここで育まれていた。

「野迫川でなくてはできないことをやってごらん。絵なんか絶対にうまく描かなくってもいいのさ。子ども達のバイタリティを思い切りぶつけるようなことを考えてみてはどうか」これは、大学卒業後もお世話になった桜井俊夫先生からいただいた言葉である。

また、野川小で入れ替わりの先輩からは「野迫川の冬はきびしいけど、その分やさしく、楽しくもあります。ぼくらもそんな教師になりたいですね」という言葉をいただいた。

写真２　経木

写真３　ソーラーバルーン

これらの言葉のような実践をめざし、とにかくやってみた。経木作りを営んでいる家の子がいたので、経木を分けてもらい、それを細く切って編み、小物入れをつくったり（写真２）、春でもまだ低い気温を利用して黒いゴミ袋でソーラーバルーンをつくったり（写真３）、秋には落ち葉でシャワーやお風呂遊びをしたり、大木にロープをくくりつけてブランコをつくったり、大雪の日に保護者の協力を得て校庭にかまくらをつくったりもした。

当時、ミニ四駆が子ども達の間で流行っていて、町では専用コースを使った大会が行われていた。「ぼくらもミニ四駆を大きなコースで走らせたい」その一言から体育館で段ボールを利用したミニ四駆コース作りを始めた。その時期は村内合同運動会前で、体育の授業は中学校での練習なので体育館の使用がなく、１か月あまり子ども達は、つくり・つくりかえ・つくる活動を楽しむことができた。このように、少人数をいかした指導はどうすればいいかを考え、実践を繰り返す日々であった。

3-2　言葉がけの大切さ

(1)「少しずつ色を変えながら点々を打つように描いてごらん」

これは、学校の周りが色とりどりの紅葉

で覆われた秋に行われた校内写生会で、高学年学級（複式学級なので）を担任していた時、３年生のＡ君にかけた言葉である。子どもの発達段階や思いを全く考えず、適当に言葉をかけてしまったため、迷いながらも言われる通りに絵の具を塗ったＡ君の絵は、色覚検査表のようになってしまった。大反省。

(2)「よく見てごらん」

Ａ君が４年生の時は私が担任になった。当時、理科でアオムシの観察カードを毎日かかせていた。私が出張に行った日に指導してくれた先生が「アオムシのあしが何本あるか数えてごらん」と声をかけたところ、Ａ君の絵が丁寧になり、あしの本数も正確になった。

自分でも「描ける」と思ったＡ君は、胸脚、腹脚の位置や形の違いまでよく観察して描けるようになった。サナギや成虫を描く頃には立体的な表現になり、Ａ君は絵が得意な子に変わった。

この経験から、私は、よく観察すれば誰でも簡単に絵が描けると思い続けてしまった。

4　ごめんね、先生が悪かった[3]（若手時代）

4-1　しっかり教材研究を

その次は、町の小学校でお世話になった。仕事も遊びも充実感を感じていたが、独り身の寂しさを感じることもあった。そこで、卒業生を送り出した春休みに心機一転のため、郡上八幡と飛騨高山に一人旅に出かけた。

高山では版画の宿「西山荘」で木版画体験をした。自分のマンガ的表現をいかす道は版画だと思い、版画が趣味のひとつになった。

木版画の活動をしたとき、下絵を版木に写す際にカーボン紙を使うと、ずれたり、線を写し損なったりすることがあった。本を読むと、薄い和紙に下絵を描き、それを裏返しにして版木に貼り付ける技法があった。和紙の代わりに習字用の半紙を用いたが、彫る段階で半紙が破けたり、外れたりと散々な結果で、下絵自体も描き直さなくてはいけなかった。

「先生、カーボン使ってもいいですか？」

「・・・いいよ」

4-2　生活と結びついた作品を

６年生で「風呂敷で何かを包んで描こう」という活動をした。子ども達は、一升瓶、サッカーボール、人形、本などを包んでいた。「難しい」「どうやって描いたらいいの？」という声が何度も聞こえたが、当時は私自身が風呂敷を日常で使っていなかったため、子ども達への言葉がけもあやふやだった。

後で、先輩から「子どもの生活と関わりのないものは描くのが難しいと思うよ」と言われた。正にその通りだと痛感した。

5　全ての学年と特別支援学級の担任を経験して（中堅時代）

5-1　アメリカ育ちの子から学んだこと

教職経験も 10 年近くになった頃に結婚した。一男一女に恵まれ、仕事も家庭も充実すると共に、自分はできるという思い上がりによる失敗があった時期でもあった。

初めて低学年（２年生）の担任をした時、アメリカで育ち、一時帰国した子を１か月担任した。教室で飼っていたザリガニをパスと絵の具で描いたところ、他の子ども達は赤色や茶色っぽい色づかいなのに、その子のザリガニは胴体が黄色、あしの部分は虹のようにカラフルに彩られていた。

観察して描く絵とは全く違う自由な表現

に衝撃を受け、このような表現が生まれる指導をしたいと思うようになった。

5-2　特別支援教育から学んだこと

特別支援学級の担任になった時は、子どもたちとスモールステップで課題に取り組みながら、「毎日がたからもの」と思える日々を過ごしていた。

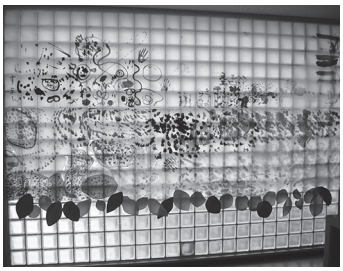
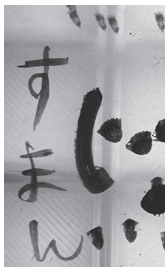

写真４・５　あじさい

合同学習で、障子紙に絵の具でアジサイを描く活動（写真４）をした。Ｂちゃんは移動する際に足が筆洗に引っかかり、水をこぼしてしまった。その後に「すまん」と書かれてあった(写真５)。Ｂちゃんは思ったことを正直に口に出す子で、ドキリとさせられることもあったが、心の優しいＢちゃんらしい表現だと思った。

身辺自立や感覚統合が課題の子にとって造形活動をいかした活動はできないだろうか、ということもよく考えていた。本もいろいろ読んだのだが､しっくりこなかった。そんな時、本学会の懇親会で、三浦義行先生から、本では分かりにくかった所も分かりやすく教えていただくことができた。中でも「ぬたくりをやるといいよ」という言葉は強く心に残り、触覚を刺激する活動も積極的に取り入れるようになった。

また、原学級の担任になってからも、感覚が過敏で、ヌルヌル感に抵抗のある子に対しては、手が洗えるなら水を筆で手に塗るところから始めよう、濡れた手で黒板に手形を押す遊びから慣れていこう、などの手立てがとれるようになった。

特別支援学級の担任での経験から、五感を使った活動を意識するようになり、アートセラピーのワークショップ等へ参加する機会も増えた。その頃からカラフルなザリガニのような表現に対する理解が深まっていった。

5-3　どん底の中から学んだこと

(1)「先生は自分の理想をぼくたちに押しつけている」

荒れた学級を担任した。先輩に「今年のことをまとめたら本が一冊書けるよ」と言われた程、数々な出来事があった。その原因は、昨年まで荒れていた状況や原因の分析が不十分で早期に適切な指導ができなかったこと、子どもの思いを受けとめられなかったこと、自信を失い毅然とした態度がとれなかったことの３つだと考えている。

学級が荒れるにつれ、子ども達の活動に根気がなくなっていった。「お話の絵を描こう」という活動では、半数以上の子が絵の具を使おうとせず、色は色鉛筆や色ペンで数か所を塗るだけだった。理由を聞くと「めんどうくさいから」そんな時に子どもから言われたのが冒頭の言葉である。私はそれを認めることができずに、正論を押し通そうとしていた。

(2) 造形活動や造形作品が持つ力

反抗的な態度をとりながらも、下校の挨拶後も残っている子達がいた。黒板掲示用の磁石付き目玉クリップを組み合わせて「何か」をつくってから帰る日が何日か続いた。また、木工工作のテープカッターづくりを終えた子達も残った端材を利用して「何か」をつくっていた。思い返してみると、活動の中や後で子ども達は「みて」と言っていた。当時の私は余裕がなく、それを単なるイタズラとしか見ることができなかったが、今は子ども達の心にとって必要な活動だったと考えている。

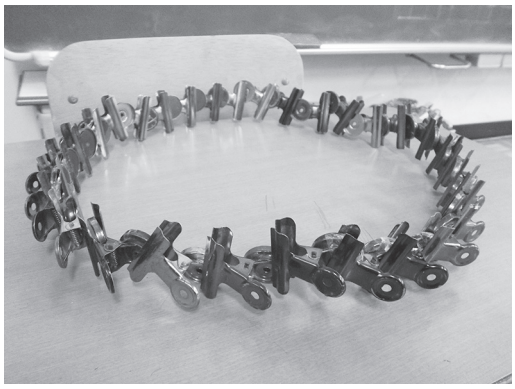

写真６　クリップの造形

写真７　風がテーマの抽象画「嵐」

３学期には郡図美研の公開授業が予定されていた。高学年の経験が豊富な先輩の実践を参考に考えたのが、絵の具のにじみをいかして表現する「心の中の空を描こう」という活動であった。自分の表現に自信を持てなくなった子ども達に、上手い・下手のない絵を描くことを通して描くことの楽しさを取り戻してほしい、様々な表現があることに気づかせたい、という思いを込めて指導案を書いた。

活動が始まった頃、イライラしていた感じに見えた子は、画面を黒い絵の具のにじみで真っ黒にした。その後は周りの子の様子を見ていたが、しばらくするとティッシュペーパーを黒のにじみに当て色を抜き、そこに別の色をにじませていった。「だんだん面白くなってきた」と言いながら表情が和らいでいき、本来の表情が見えてきた。（その子が書いた授業後の感想より）

①色から感じたこと「暗い中に明るいのがある」②形から感じたこと「いい感じになった」③作品づくりをしているときやできあがってから思ったこと「最初のうちはいらついていて、できあがるうちには落ち着いていた」

不甲斐ない自分自身への苛立ちなどで心がいっぱいになり、折れそうだったときに「風」をテーマに描いた絵（写真７）がある。描くことで、気持ちが少しはましになったが、一番の収穫は共に絵を描いていた仲間に「パワーを感じる」「元気な絵やね」と言われ、勇気づけられたたことだ。

自宅の台所の食器棚の横に娘が５歳の時に描いた妻の絵（写真８）を貼っている。私はこの絵を見るたびに壊れそうな心を持ち直すことができる。色あせても絵が持つ力は健在。今も時々助けてもらっている。

当時の校長先生から「花の咲かない寒い日は　下へ下へと根を伸ばせ　やがて芽が出て花が咲く」と書かれた短冊（写真９）を、教頭先生から山本五十六の「男の修行（苦しいこともあるだろう…）」の複写をいただいた。書き文字の力にも日々支えられている。

写真８　いつもありがとう

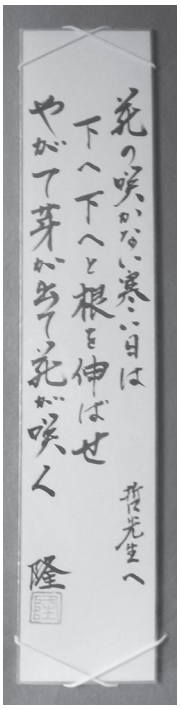

写真９　哲先生へ

6　学会での発表（ベテラン時代）

教職経験も 20 年を過ぎ、同僚から図工のことについて聞かれることが多くなり、前述のカラフルなザリガニに近づくような絵も見られるようになった。そこで、思い切って第 26 回堺大会で初めて発表させていただいた。ザリガニを描いた絵の実践については「どうして上から見たザリガニばかりなのですか」というご指摘があった。自由な絵を描く指導のつもりで、子どもを誘導していたことや、まだ観察の絵にとらわれていたことに気づき、赤面した。

そこでの猛反省を元に、クラスの子ども達全員がザリガニを手でつかめるほど触れあう時間を作り、ねん土での立体表現や、墨と筆を用いた勢いのある線での表現などにも取り組み、指導の改善を試みた。その中から、子どもが自然に発する「みて」や「これでいいですか」などの言葉に込められた思いについて考えるようになった。

リベンジのつもりで数年後の尼崎大会、神戸大会でその後の実践を発表させていただいた。その頃から、色々な場所で実践発表の機会を与えていただけるようになり、実践と研究を繰り返していった。

本学会の特色として「夜の部」での実践交流がある。そこで私は自分の怒りをコントロールできない子への指導上の悩みをさらけだした。その時、話の輪に入ってくださった先生方から、ヒントやアドバイスをいただき、指導を見直すことができた。

耳成小学校では「おたから研修」という自由参加の研修がある。これは自分の得意ネタを実践形式で他の職員に紹介するもので、私は図工を扱うことが多い。

放課後に「団上先生、うちの子の作品を『みて』ください」と言われる時もある。始まりは作品の話なのだが、次第に子どもたちの日常や成長の話へと広がっていく。

7　まとめ

このように、私は本学会の先生方に育てられ、現場で鍛えられてきた。また、若手時代から事務局の先生方がその都度連絡をくださったおかげで、好奇心の赴くままに活動してきた丁の私が本学会との関係を絶たれず、学び続けることができた。

中堅時代の後期に辻田先生から「図工がちゃんと教えられるようになれば、何でも教えられるよ」と言われた。ちゃんとした図工の指導には、教材研究、児童理解、生徒指導、特別支援教育、人権教育など、教育に必要な要素が全て盛り込まれている。

「子どもを育てる　子どもに教える　愛をこめて　わかりやすく」これは西光寺亨先生からいただいた言葉である。忙しかったり、ちやほやされたりして、指導が雑になったかもしれないと思った時は、この言葉通りにできたか自分に問いかけている。

今後も実践と研究を積み重ねていくとともに、実践から学んだ不易の部分を伝えていくことが、私を育ててくださった人々への恩返しだと考える。

紙面の都合で書き切れませんでしたが、私を育ててくださった全ての皆様、本当にありがとうございました。

〔注〕

1　1998,「美育文化８月号特集あそびの探検」, 財団法人美育文化協会 ,p58-61

2　辻田嘉邦 ,2002,「造形・美術の教育評価」, 日本文教出版株式会社 ,p.161-162

3　2000,「美育文化５月号特集ごめんね、先生が悪かった」, 財団法人美育文化協会 ,p32-34